



雑 感

附属図書館長 大 野 公 男

館長というお役目を拝命したのが4月1日、半月もたっていない今、まだ西も東も判らないという状態である。これは文字通りの意味も含まれている。つまり増築のできた本館内はなかなか複雑な構造になっていて最近の“榆蔭”に載っていた地図を持って歩かないと迷ってしまいそうで不安な気持がする。

前館長東晃先生から受けた事務引継の中に“榆蔭”を固苦しくなく読み易いものに努力したという一項があった。この方針には大賛成なのだが、果して合格する文章が書けるかというと、これまた甚だ心細い。

それはさておき、今年度の予算で月額レンタル約290万円の計算機システム導入が認められた。ただし昭和60年度は1ヵ月分だけの予算なので昭和61年3月から稼動することになる。幸い東前館長が学内のエキスパート5名の委員からなる機種選定委員会の設置をきめて下さっていたので、その第一回会合が4月早々に開かれた。この機種選定がいわば初仕事になりそうだ。

電算機導入の目的は、いわゆるハウスキーピング業務つまり図書館内の業務処理の他に、全国共同利用施設である東京大学文献情報センターと結んで、目録・所在情報サービスを利用者に提供するという大事業がある。このためには本学にある雑誌・図書の目録・所在情報のデータベースを構築して東大文献情報センターに送らなければならない。各大学がこれを実行することによって我国の全図書館の蔵書数の6割を占める大学(国・公・私)の蔵書について、コマンド一発でどの本はどの大学にあるかが判る仕組になるわけだが、正直に言ってここに到達する道は遠く且つ険しい。いつになったらそういう状況が作り出せるか、まだ誰にも予測がつかないのではなからうか? 従って我々は効率的なやり方を常に模索し、且つ着実な一步一步を進めて行かねばなるまい。

しかも文献情報のデータベースを構築しそのオン・ライン検索を図るというのは、本来の学術情報システムのほんの一部にしか過ぎない。一次情報の迅速な提供にもネットワークが利用できるはずであり、さらに大型データベースによる情報提供も——これは予算さえつければ比較的早期に——実現されよう。現在は大型データベースは外国で作られたものが圧倒的だが、将来はたとえ小型からスタートしても国産のデータベースが作られていくに違いない。情報の大幅な輸入超過に我が国にとって由々しい問題となる恐れがある。

学術情報はそれ自身が貴重な資源であって、その量が爆発的に増え続けていることから、それを機械可読な形にして全大学のネットワークを通じて共有しようという精神は忘れまい。しかし伝統的な図書館の役割りの本質は、前号の「楡蔭」に医学部図書掛の斎藤さんが書いておられたように、少しも変わらない。情報を蓄積し、次代へ伝えること、及びすべてのことが学問を研究し学ぼうとする人達(利用者)のために行われるという考えに私は心から賛同するものである。

退 任 に よ せ て

前附属図書館長 東

晃

僅か1年半の短期間でありましたが附属図書館長の重責を担わせて頂き、大過なく勤めることが出来たのは、事務部長を始めとする図書館職員の皆さん、また全学の諸先生の御支援のお蔭と感謝いたしております。ふりかえてみますと、在任中の大半は図書館の増築工事期間にあたり、図書館長の名は何回かの「休館のお知らせ」で全学に知れ渡ったようです。その増築も昨年9月末に終り、書庫移動等の内部の整備を終って、増築完成祝賀式典によってその喜びを皆様とわかち合うことが出来たのは今年1月のことでありました。

私の前任館長であられた塩谷先生は、この「楡蔭」によせられた退任の御挨拶の中で、図書館長はたとえていえば大名の殿様のようなもので、事務部長以下有能な職員が家老・臣下としてそろっているの、日常業務には口出しをしなかったという趣旨のことを書いておられます。私の場合は、そこまで徹底できず時々気になることに余計かも知れない口をきいたことがあります。

図書館には多くの教官が御存知のない業務が沢山あります。一冊の本が買われて書架にのせられて利用に供せられるまでの会計の手続き、整理登録(カード作り)といった手続き等々ですが、年間何万冊にも及ぶこのようなルーチンの仕事だけでも相当の負担ですから、こういう地味な日常業務こそ自分達の仕事、いわば縁の下の力持ちでよいのだ、という気持ちが職員の間で強いように思われます。

しかし図書館が大学の教育・研究の中核として本当に機能してゆくためには、図書館のやっていること、やろうとしていることを教官や学生によく理解してもらうことが必要であります。そのためのメディアとしてこの「楡蔭」をもっと活用できないだろうか、というのが私の口にしたことでありました。昨年から編集担当の構成を変え、新機軸を出そうと試みていることにお気づきでしょうか。

似たような意味のPRには機会が与えられれば館長自身も努力いたしました。教養部報「ようらく」には選書のことを、「大型計算センターだより」には図書館の機械化について書かせてもらいました。

お殿様のたとえをもう少し使わせて頂くと、館長が国立大学図書館協議会の総会や理事会に出席するのは大名の江戸参勤に当たります。総会には將軍の名代、本省の担当課長が出席されます。勿論、民主政治の今日だから、それから先のプロセスは封建時代とは違います。言論の自由又は言論の力を使って、図書館の予算獲得につなげようと多少意図的発言をしたこともあります。それが功を奏したなどとは申すまじきことですが、年来の懸案であった図書館電算化

と学術情報課の新設が今年度予算に認められました。

北大図書館では東京の文献情報センターを中心とする全国ネットワークの地域センターとしての役割を果たすべく館員は電算化に向けて準備に余念がありません、という嘘いつわりのない職員の熱意が実ったわけです。そういう意味では前述の力持ち意識も段々変って来ていると言えましょう。

今年度から電算化実施のための大仕事が始まるわけで職員の御苦労も察せられますが、その指揮をとって下さるのはまことに最適任の新館長大野公男先生であります。新しい時代を迎える図書館の益々の発展を希望して退任の挨拶に代えたいと思います。

◆ 会 議

第119回 図書館委員会

<と き 昭和60年3月19日(火)>

<ところ 附属図書館会議室>

議 題

1. 昭和61年度概算要求の基本事項について
2. 図書館業務用電子計算機の導入計画について
3. そ の 他

第82回 教養分館委員会

<と き 昭和60年4月25日(木)>

<ところ 教養分館会議室>

議 題

1. 昭和60年度教官指定図書の選定について
2. そ の 他

北海道地区国立大学図書館協議会

<と き 昭和60年4月18日(木)>

<ところ 旭川医科大学>

議 題

1. 北海道地区における学術情報システムのネットワークについて
2. 地区大学図書館の業務電算化の早期実現について
3. 地区における電算化要員の養成・研修について
4. 第32回国立大学図書館協議会関係について
5. 次期当番館について
6. そ の 他

北海道地区国立大学附属図書館事務(部・課)長会議

<と き 昭和60年2月26日(火)>

<ところ 北海道大学附属図書館会議室>

議 題

1. 北海道地区における情報ネットワークについて
2. 学術情報システムに対する道地区ネットワークの形成及びその対応について
3. 図書館業務電算化に伴うプログラムの利用について
4. 第17回北海道地区国立大学図書館協議会の日程等について
5. 図書館職員講習会について
6. 北海道地区大学図書館協議会 一会費制の問題について
7. そ の 他

学 内 だ よ り

スラブ研究センター図書室

沿革 スラブ研究センターの前身である「スラブ研究室」が、ソ連・東欧諸国を研究する機関として北海道大学の学内措置により設置されたのは昭和28年(1953)のことであった。研究員には学内関係者のほか学外の併任研究員も含まれていた。それは戦前の厳しい思想統制のゆえに損われていたわが国のソ連研究の水準を高めるため、当初から全国の研究者の共同研究機関として発足したのである。戦前にわが国で組織的なソ連研究をおこなっていたのは満鉄や外務省などの諸機関にすぎず、大学ではロシア文学や語学の研究以外はほとんどおこなわれていなかった。

以上のように過去におけるソ連・東欧研究の不振は、当然のことながらその分野の文献資料の蓄積が大学では非常に僅かであることを意味していた。しかも本学の場合は戦前は自然系の総合大学であったため、そのような文献はほとんど皆無に近かった。それゆえスラブ研究室の仕事はまず研究資料の収集から始められねばならなかった。当時は戦後まもない頃で予算的にも窮迫した時代であったが、幸いにもアメリカのロックフェラー財団から図書購入資金として500万円(『北海道大学創基80年史』による)が提供され、国内外の古書市場からかなりまとまった収書が可能となった。そのことによりスラブ研究図書コレクションの最初の核が作られたのである。その頃の収書をみれば単行書も雑誌も基本的な資料が精選して集められており、マイクロフィルムによる補充も始められていた。

昭和30年(1955)7月スラブ研究室は官制上の研究機関となり、法学部に附属することになった(昭和30～33の期間は「スラヴ研究所」と称していた)。建物としてはそれまで「北方文化研究室」が使用していたもと札幌農学校の昆虫学講堂の一部が当てられ、石造りの昆虫標本室が書庫となった。官制化とともに専任の研究員のほか助手や事務職員の定員も認められて研究態勢もとのい、昭和32年には『スラヴ研究』が発刊された。その頃の図書の発注、整理、貸出業務は助手と事務職員2名が行なっていた。

スラブ研究室は昭和37年(1962)に「スラブ研究施設」と改称し、昭和41年(1966)には法学部研究棟の新築にともないその2階部分に移転した。その際にスラブ研究施設の蔵書の大部分は隣接する中央図書館の書庫3層に移され、それ以後図書の貸出業務は図書館の管理によって行なわれることになった。

これまでの25年間にそれ程大きな変化のみられなかったスラブ研究施設の機構および予算の規模に著しい発展がみられたのは、昭和53年(1978)にそれが「スラブ研究センター」に改組された以後のことである。そのことによりセンターは教授定員7、客員教授3(うち外国人2)のほか多数の学内外の併任研究員を有する独立した研究機関となり、わが国におけるソ連・東欧研究のユニークな学際的機関として国際的にも認められるようになった。昭和55年(1980)には機構の拡大に伴う研究棟の増築工事が承認され、5階建の4～5階がスラブ研究センターの研究室と会議室、1階が事務および図書関係に当てられた。図書関係としては図書整理室、参考図書室、新刊雑誌室があり、そのほかにマイクロ資料室も4階に設けられた。

以上のようなスラブ研究センターにおける研究機能の著しい充実があった一方で、何らの変化もみられなかったのが事務機構である。予算や受入図書の飛躍的増加のほかに幅狭する事務量の増大にも拘わらず、事務定員は設立当時と同じ2名にすぎないため、庶務については今

なお法学部に依存している状況にある。センターの予算の大半は研究のための図書費に支出され、国内外の研究者や研究機関から文献その他の情報についての照会も日常的であるが、これらの業務を一貫して行なう図書室の定員は僅か1名にすぎない。

蔵書の特徴 スラブ研究センターの蔵書の増加は、設立から約20年間は遅々たるもので、この間の年平均受入冊数は科研費による購入図書を加えても約1,000冊にすぎなかった。しかし昭和53年(1978)に「研究施設」が「センター」に改組されたところから受入冊数は急速に増加しはじめた。その年の年度末近くに文部省から図書資料購入のための特別予算が配分され、時を同じくして文部省は「図書資料(大型コレクション)収書計画」のための予算を国立大学図書館に配分した。それらはこれまで購入できなかった高価なスラブ関係コレクション(マイクロ資料を含む)の購入を可能にするものであった。さらに1981年にはスラブ研究センターの概算要求による「基本図書整備5カ年計画」も承認された。この計画案は、当センターとほぼ同じころ設立されたアメリカのイリノイ大学ロシア・東欧センターをモデルとし、蔵書冊数をその1/5の規模に近づけることを目標にしていたが、実際の予算額は要求の40パーセントにみたなかった。とはいえ以上のような図書資料購入のための特別の予算措置は、戦後40年近く経ってはじめてスラブ研究センターが多少ともまとまったロシア・東欧関係コレクションを形成する端緒となり、また中央図書館の協力もあってここ数年間に北大におけるスラブ関係の図書資料を飛躍的に充実させることになった。

スラブ研究センターの蔵書冊数は、1985年4月1日現在で約43,000冊(うち洋書40,000、和書3,000)、そのほか15,700タイトル(2,500リール)のマイクロフィルム、2,300タイトル(42,000シート)のマイクロフィッシュがある。洋雑誌の継続受入種類は180種、和雑誌は140種であるが、和雑誌の場合は交換受入れがほとんどでスラブ関係は僅かである。当センターのロシア・東欧コレクションの分野は人文・社会科学に限られており、そのなかでも歴史、文学、政治、国際関係、経済、法律関係の文献が多数を占めている。その過半はロシア語である。センター設立の歴史が浅いこともあって、とくにロシア語文献では第2次大戦以前のは少く、革命前のオリジナルの出版物となると非常に僅かである。しかし最近では個人コレクションの購入やマイクロ資料の充実によりこの欠陥も急速に補われ始めている。

ソ連・東欧関係資料の収集に際しては定期刊行物や参考図書にも重点がおかれている。とくに西欧諸国のスラブ関係定期刊行物は、もっとも基本的なものが初号から完全なたちで揃っている。参考図書はおおよそ2,700冊あり、ソ連・東欧の百科事典、主題別事典、言語辞典、統計書および書誌類がかなりよく集められている。たとえばロシアの百科事典では、ブロックハウス百科、ブロックハウス・エフロン新百科、グラナート大百科、ソビエト大百科(初版から第3版まで)、その他数セットの小百科事典がある。言語辞典はその種類も多く、ソ連の諸共和国の言語のみならず、コミ語、マリ語、ツワ語などの自治共和国の言語から教会スラブ語、マケドニア語、ソルブ語にまでおよんでいる。

昭和53年(1978)以降受入れたマイクロフィルム、フィッシュ資料のうち主なものとして次のようなものがあげられる。

1) 18世紀ロシア出版物集成(18th Century Russian Publications)

レーニン図書館がその他の図書館の協力をえて編集した *Сводный каталог русской книги гражданской печати XVIII века 1725~1800, том 1~5* に収録されている図書をマイクロフィルムで複製したもの。今まで購入されたマイクロフィルムは Vols. 1~3 収録中の約4,900点(800リール)である。

2) ヘルシンキ大学所蔵革命前ロシア貴重文献コレクション (Russian History and Culture)

ヘルシンキ大学図書館 (以前この図書館は帝政ロシア時代の国内全刊行物寄託図書館の一つであった) が所蔵する 19~20 世紀初頭の出版物のうち、イリノイ大学ロシア・東欧センターが選択した約 2,000 点の稀観書をマイクロフィッシュに収めたもの。現在第 1 シリーズ (1~18 ユニット) が完結し、約 1,950 点が受入れられている。

3) ロシア革命文献コレクション (Russian Revolutionary Literature)

ハーバード大学のホートン図書館が所蔵している 1917 年以前のロシア革命関係資料約 1,100 点 (47 リール) をマイクロフィルム化したもの。内容はゲルツェン以来の革命思想家たちの著作、アジブラ、パンフレット、雑誌などで、その多くは国外出版物もしくは地下出版物である。

4) 『日本書誌』 (Библиография Японии) のマイクロフィルム版

1 部と 2 部に分かれ、約 14,000 タイトルの文献を含み、726 リールに及ぶ膨大な資料である。(第 1 部の「外交」と「宗教」は附属図書館所蔵) 1734 年以来 1958 年までにロシア・ソ連で刊行された日本関係の単行本、雑誌論文をマイクロフィルムに収めたもの。日露・日ソ関係の研究にとって不可欠の貴重なコレクション。

上記のコレクションの他に革命前の定期刊行物としては次のようなものがある。Вестник Европы, 1802~1830; Телескоп, 1831~1836; Библиотека для Чтения, 1834~1865; Акты Исторические, 1841~1872; Дополнения к Актам Историческим, 1846~1875; Морской Сборник, 1848~1940; Publications of Zemstvo, 1860~1917; Русский Архив, 1863~1917; Вестник Европы, 1866~1918 など (これらは全部マイクロフィッシュ)。さらに 19 世紀中葉から革命まで継続出版された雑誌でオリジナルで受入れたものには Чтения в Императорском Обществе Истории и Древностей Российских при Московском Университете, 1846~1918 (一部分マイクロフィッシュ); Русская Старина, 1870~1917; Русское Богатство, 1884~1913; Русская Мысль, 1880~1922; などがあるが、いずれも僅かずつ欠落部分がある。

さらにロシア・東欧関係学位論文集 (Doctoral Dissertations on Russia, & Eastern Europe) は選択的にしか受入れられていないが、両者あわせて約 2,500 タイトルにおよぶ大きなコレクションとなっている。その他わが国の研究者に久しくその名が知られながらも利用することの出来なかった貴重な資料も少なくない。けれども最後に当センターが特に誇りに思うものの一つをあげるにとどめたい。1980 年度に購入した G. レンセンの個人コレクションがそれである。和・洋あわせて約 3,200 冊、450 タイトルのマイクロフィルム (130 リール) からなり、主題は日露・日ソ関係であり、この分野の研究者にとっては必須のものであろう。

スラブ研究センターの初期の蔵書内容を具体的に示すものとして次のような蔵書目録がある。

『欧文図書目録 1953-1965』札幌, 1966.

『欧文図書目録 1966-1970』札幌, 1970.

『マイクロフィルム所蔵目録 1953-1973』札幌, 1971.

『欧文雑誌目録 1953-1973』札幌, 1973.

これら以降の目録はまだ出版されていない。すでに「沿革」においてのべたように、現在の当センターの図書室では日常の図書受入れ・整理業務も滞りがちな現状で、目録を作成する余裕はない。しかしながら 1971 年から『スラブ研究』に「図書室だより」欄がもうけられ、その年度に受入れた主な図書のリストや簡単な資料紹介の小文が掲載されている。その他松田潤編『ソ連東欧研究文献目録』が 1978 年から継続出版中である。これは毎年わが国で刊行され

たソ連・東欧研究とこれに関係すると思われる分野の単行書および雑誌論文等を収録している。

最後に附属図書館が受入れたスラブ関係のコレクションに簡単にふれてこの小文を閉じたいと思う。1978年から文部省の「図書資料(大型コレクション)収書計画」にもとづいて購入されたものには次のようなものがある。

1978年度 1) スヴァーリン・コレクション(Boris Souvarine Collection). 862タイトル。
2) ヴェルナツキー文庫(An East European Collection in Western Languages). 3,886タイトル。
3) 18世紀ロシア研究叢書(18th-Century Russian Studies). マイクロフィッシュ, 464タイトル。

上にのべた1)と2)については、すでに附属図書館の小西和信氏等の手によってすぐれた目録が作成されており、前者は *Russian Revolutionary Movement Literature in the Boris Souvarine Collection; a Catalogue*. (Sapporo, 1980, 164 p.) 後者は *Russia and Eastern Europe; a List of the George Vernadsky Collection*. (Sapporo, 1982, 403 p.) の書名でそれぞれ出版されている。

1980年度 英国外務省外交記録, ロシア・ソ連関係文書, 1892~1945 (British Foreign Office. Russia Correspondence, 1892~1945). マイクロフィルム。786リール。

1982年度 ソ連の対外関係に関するエプシュタイン・コレクション(The Epstein Collection on the Foreign Relations of the Soviet Union). 約2,300タイトル。

1983年度 ロシア亡命文学コレクション(Collection of Russian Emigre Fiction). 約560タイトル。

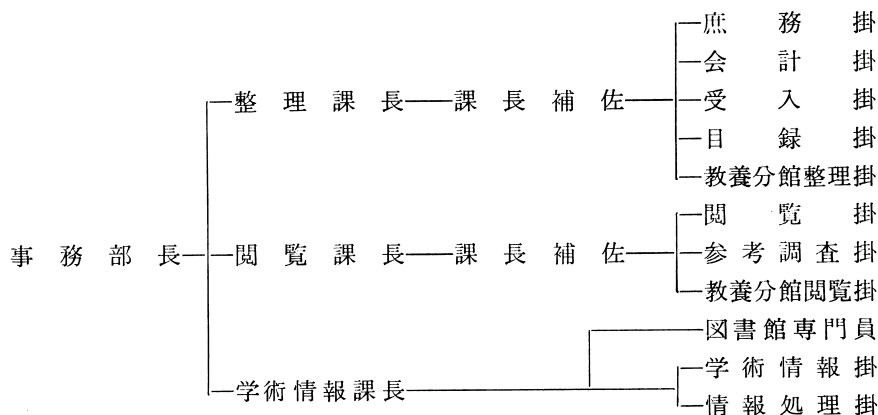
1984年度 レオン B. ベルンシュタイン・コレクション(The Collection of Leon B. Bernstein). 約5,000タイトル。

これらはいずれもすぐれた特色をもつコレクションであるが、とくに昨年度購入されたベルンシュタイン・コレクションは単行書、雑誌、政治組織のマニュスクリプト、パンフレット、革命運動家達の手簡、声明書などからなる膨大な資料であり、スヴァーリン・コレクションと補足しあいながら北大をロシア革命資料の豊庫にしている。

(スラブ研究センター図書室 秋月孝子)

事務組織の改正について

本年4月から附属図書館に学術情報課が設置されたことに伴い、下図のとおり事務組織が改正されました。



ヨチヨチ歩きを始めた「ガクジョーカ」

新語、略語、カタカナ言葉が氾濫する当節、もう一つ妙な略称を増やしたいとも思いませんし、本心からすれば「学術情報課」という立派な名前で呼んで欲しいのですが、どうも我々の課の名称は「ガクジョーカ」に定着しつつあるようです。

さて、その学術情報課は学術情報掛と情報処理掛の2掛で構成されているのですが、どちらも名前負けしそうな立派な名称で、これからそれにふさわしい仕事ができるかどうか「乞うご期待」といったところです。

当面、学術情報掛が雑誌に関する業務を引き継ぎ、電算化システム構築の技術的な側面を情報処理掛が旧学術情報掛から引き継いだ形ですが、システム全体の設計と運用に至る作業は2掛の枠を越えた全課一体（といっても8名）の体制をとり、そのために課長と図書館専門員がおります。

学情課の部屋は、増築された本館の2階、南東角の「陽の当たる場所」にありますが、部屋の中央に大テーブルをデンとすえ、我々は隅っこに机を並べています。この大テーブルこそが学情課のシンボルであり、このテーブルを囲んで、学情課の職員やシステム設計実施部会のメンバーだけでなく、各業務ごとに担当の職員が激論を戦わすことになると思います。つまり、学情課の大テーブルは全学の図書系職員のデスクなのです。

システム作りについては、目下、機種選定の段階ですが、システム設計の基本的構想は全学の図書館(室)からオンラインで図書と雑誌の北海道大学総合目録を検索できるようにすることにあります。また、これと平行して東京大学文献情報センターに累積されつつあるアメリカ、イギリスを中心とした世界的な書誌データと国立国会図書館で作成される全国総合目録データを居ながらにして検索できるようにするシステムが目下、文献情報センターで作られつつあります。

こうしたシステムを、分かり易く操作し易いものにするために、我々図書館員は、これまで蓄積してきた経験と知識を絞り出しているところです。しかし、学術資料の書誌的特徴を記述しその主題を分析して、多面的に検索できるようにするためには、データの構造がかなり複雑なものになりますので、システム作成には膨大な金と時間が必要で、一度できあがったら容易に変更できないものと考えるのが妥当なようです。どうか、図書館を利用される方々の忌憚のないご意見をお聞かせ下さい。よりよいシステム作りに生かしたいと思いますから。

使い易いシステムを作ってゆく一つの目安として、次のような物差しを設定してみました。いかがでしょうか。

同じ機能を果たせるものなら、

1. 結果に至る画面が少ない方がよい。
2. 使用するキーの種類が少ない方がよい。
3. 打鍵数が少ない方がよい。

さて、コンピュータを使う狭義のシステムが完成しても、図書館のシステムが完成するわけではありません。狭義のシステムを使って書誌データを作ってゆくことこそが、図書館の課題です。データがあってこそこの図書館システムです。こう考えると、学情課が担当するシステム作りはごく小さな部分です。

課の中でも、学術情報掛は雑誌に関する諸データを作ってゆくという仕事を持っています。したがって、書誌データの品質管理といった問題が今後は大きな課題になると思われます。

学情課は図書館の中でも一番小さな課です。実際の作業も、本誌で名簿が掲載されるシステム設計実施部会のメンバーに大きく依存しなければ進めてゆくことができません。また、学情課の職員といってもコンピュータの専門家であるわけではありません。これからの作業の過程で、学内の先生方からはご専門の分野でのお知恵を拝借しなければならないことも多いと思われれます。

やっとヨチヨチ歩きを始めたばかりの学情課をご理解いただき、ご支援とご助力をお願いします。
(学術情報課)

雑誌閲覧室の利用変更について

雑誌の利用についてはこれまで一般雑誌は開架閲覧室に、学術雑誌は雑誌閲覧室(3階西側)に展示し利用していただいておりますが、このたび学術雑誌を開架閲覧室内の一般雑誌と近接した個所にコーナーを設け移動することにいたしました。利用時間帯も開架閲覧室と同じく、平日は午後8時、土曜日は午後4時半まで閲覧できますので御利用下さい。

なお、雑誌受付事務は従来雑誌閲覧室で行っていましたが、学術情報課事務室(2階東側、学術情報掛内線 3497・4026)に移りましたので併せてお知らせいたします。

(学術情報課)

資料紹介

昭和59年度 全国共同利用図書購入費で購入した図書

The Collection of Leon B. Bernstein

ベルンシュタイン・コレクションを手にして

スラブ研究センター教授 長谷川 毅

本屋から送られて来るカタログには羊頭狗肉のものが多く、従って私は最初、コロンビア大学のベシェンコフスキ教授によって書かれた分厚い二巻本のベルンシュタイン・コレクションのカタログなるものを目にした時、こんなものがまだ一体存在しているのだろうか、半信半疑であった。

それはレオン・ベルンシュタインというロシア亡命人のジャーナリストが、1905年以降パリを本拠として60年にわたって丹念に集めてきた5,000点にもなる莫大なコレクションであり、その中心をなすロシア革命運動のコレクションは、モスクワのマルクス・エンゲルス・レーニン研究所、アメリカのフーヴァー研究所、アムステルダム为社会運動史研究所にも匹敵するものであるという、べら棒なことが書いてあった。

ベルンシュタイン自身、ナチ占領下のパリにとどまっていたという事情から、パリから亡命した亡命社会主義者や組織の蔵書・資料類をゴッソリと手に入れたという事情があるらしく、パーヴェル・アクセリロード蔵書、ボリス・クリチェフスキー蔵書、グリゴリー・アレクシンスキ

一蔵書の全てや、ブンド、ロシア社会民主党外国本部、エスエル党アルヒーフ、ロシア社会民主党中央委アルヒーフなどの一部がコレクションに付け加えられたという。

この類のコレクションは、ある特定の革命組織のみに限られていることが多いが、カタログを読むと確かにベルンシュタイン・コレクションにはボリシェヴィキ、メンシェヴィキ、エスエルはもとより、色々名もあまり知られていない革命組織の雑誌や資料が集められている。しかも20世紀初頭の革命運動に限らず、19世紀の革命思想家の作品、例えばラディンチェフ、デカブリスト、ヘルツェン、オガリョフ、バクーニン（全集は殆ど初版本である）や、ネチャーエフの宣言のオリジナル、「人民の意志」派の資料等も含まれている。

これだけでも気の遠くなるような話であるが、まだそれ以上のことが書いてある。

このコレクションにはソ連の歴史と文化の基本的な書物が含まれている。とりわけ「ロシア文化の銀の時代」を代表するソロヴィヨフ、ベルジャーエフ、ブルガコフなどの諸作品、19世紀のロシア文学者の初版本や全集等独立して購入すれば非常に高価なものが含まれている。

その他、ベルンシュタインの好奇心はロシア革命でとどまらず、革命後も彼はソビエト時代の様々な問題についての書物を収集した。特にフランス語で書かれたソ連論がこんなに揃っているコレクションはおそらくフランス以外にはあり得ないであろう。また第二次大戦後スターリンの死に至るあまり研究されていないスターリン後期について、このコレクションは世界のどこの図書館にもあり得ないような莫大な謄写版刷りの一般向きの啓蒙的講演の要約を含んでいる。この資料はスターリン後期の研究にとって必須のものとなるであろう。

という様なことが延々と書かれているカタログを読めば、私がこれはあまりにも話がうまく出来すぎていると直感したのもうなずかれると思う。ベシェンコフスキー氏は本屋とぐるになり、これを高く売りつけようとしているに違いない。大体私もロシア革命の研究ではかなり自信があるが、ベルンシュタイン・コレクションなど聞いたこともない。また、世界の殆どどのロシア革命史研究者と私は面識があるが、誰もこのことを私に語ったことはないし、彼らの研究の中で言及されていることもない。マユツバものに違いないと結論した。

従って昨年の秋、ニューヨークに行ったついでにハンター・カレッジにあった現物を見に行ったが、私には、さて、どこまで本当か見てやろうという不遜な態度があった。だが、何としたことだろう。現物を一つひとつ取りあげて行くうちに、私は身が震えるように興奮してきた。ベシェンコフスキーが誇張していることは何もない。おそらく『宝島』の宝庫を探し当てた海賊でなければ、このようなゾクゾクした興奮は味わえないであろう。私はうっとりと、豪華版の『古代衣装史』を眺め（この五巻本は欧米の図書館にも完全なセットは存在しない）、ポトレソフの小冊子を愛撫し、『イストラ』がまるで昨日の新聞のように完璧に一号から最終号まで揃えられているのを何かの奇跡のように思って、神の前に跪いたのである。とりわけコレクションを管理している図書館員の研究室の書棚に丁寧に保管されていたパンフレット類はそれこそ宝物の中の宝物である。ベシェンコフスキー氏は確かに正しい。ここにはモスクワにも、ブーヴァーにも、アムステルダムにもないものが多く含まれている。

しかし、こんなに優れたコレクションが何故研究者に知られていなかったのかという謎が残る。事実はこういうことであつたらしい。

ベルンシュタインはこのコレクションの一部をデッカー・ノルデマンという本屋に売却した。（これが一橋大学が購入したものである。）しかしこれはベルンシュタイン・コレクションのほんの一部にすぎず、最も主要な部分は1956年にシカゴのニューベリー図書館が購入することに成功した。コレクションはニューベリー図書館で整理され、カタログされた。パンフレット

類は一つ一つ丁寧に特別に作られて箱に入れられている。しかし1960年代にニューベリー図書館はアメリカ研究に関するコレクションのみに集中することに決定し、ペルンシュタイン・コレクションをニューヨークのハンター・カレッジに売却した。しかしハンター・カレッジもニューヨーク市の財政難と60年代の大学革命のとぼっちを受けて、とてもロシア史のコレクションを充実させる財政的裏づけがなく、これを売り出すことに決定した。これが約30年間この貴重なコレクションが、文字通り指で数える位の専門家の間でしか利用されていなかった理由である。しかしその反面、コレクションは仲介に立つ本屋にバラバラにされずそのまま保存されたという僥倖にも恵まれていた。

このようなコレクションが、北海道大学附属図書館の関係者の努力と、文部省の勇気のある決断のお蔭で日本にきたことは、日本のロシア・ソ連研究にとっては画期的なことである。これを基礎にして、今後ロシア・ソ連関係のコレクションを拡充すれば、北海道大学はフーヴァー研究所、ヘルシンキ大学、ハーヴァード大学、コロンビア大学に匹敵する世界的な水準にまで一抛に高まる可能性がある。

20年前私は東京大学でロシア革命に関する卒業論文を書いていた。その時、何と日本のロシア関係のコレクションはみすばらしいものかと痛感した。これが私のアメリカに留学する第一の動機でもあった。ペルンシュタイン・コレクション購入に象徴される日本の資料の充実ぶりはその時と比べると雲泥の差がある。

しかしまだやらねばならぬ事は沢山残っている。ペルンシュタイン・コレクションは、これからのソ連・ロシア研究発展の為の一つの糸口にすぎないのである。

昭和 59 年度 特別図書購入費で購入した図書

Северная Пчела: Газета Политическая и Литературная. 1825-1863.

Lack: 1836 (43), 1861 (41-43, 49, 250, 281, 298-299), 1862 (292), 1863 (169-171)

(北方の蜜蜂) マイクロフィッシュ

君主制を擁護した文芸・政治新聞。1825-1831年ブルガーリン、1831-1860年ブルガーリン、グレーチ、1860-1864年ウーソフが編集した19世紀初・中期ロシアの有力な文芸誌であると同時に批評、論文を数多く載せている。又、ペリンスキー等の進歩的知識人と文学論争をはなばなしく行った。

Entscheidungen des Bundessozialgerichts. Bd. 1-55 u.

Registerbande (1956-1984)

(西ドイツ連邦社会裁判所判例集)

西ドイツ連邦社会裁判所の判例集。

Protokolle der Commission zur Berathung eines allgemeinen deutschen Handelsgesetz-Buches. Bd.1-11 (1857-1861)

Reprint ed. (1984)

(ドイツ旧商法典草案委員会議事録)

1861年に成立した普通ドイツ商法、すなわちドイツ旧商法の立法過程における委員会の議事をすべて収録した資料である。

**Encyclopaedia Universalis. Corpus 1-18, Thesaurus
Index & Symposium. 1984-1985.**

(ユニヴェルサリ大百科事典)

フランスの本格的百科事典。大項目主義をとっているが、索引には各項目について簡潔な解説を付している。

Wilhelm Wengler: Internationales Privatrecht. 1-2 Teilbd. 1981.

(国際私法注釈書)

国際法、国際私法の大家であるヴェングラー教授が著した最近では最も大きな注釈書である。

Dissertations in European Economic History. Series II.

(ヨーロッパ経済史学位論文 シリーズ II)

ヨーロッパおよびアメリカの重要な未公刊学位論文 36 点のコレクション。

Management Bibliographies and Reviews. Vol. 1-6 (1975-1980)

(経営学文献総説)

経営学に関する多数の文献を系統だてて収録している。又、種々のテーマにそった各論説は経営学の最新の動向を鋭く見通しており、組織管理、マーケティング、技術開発、生産管理等についての現在と今後を探るうえで最も新しい情報を提供している。

Der Arbeiterfreund; Zeitschrift für die Arbeiterfrage.

Jg. 1-52 (1863-1914)

(ドイツ労働問題研究誌)

19 世紀後半から 20 世紀初頭に至る時期のドイツの労働者の状態、労使関係、社会政策に関する論文、記事を数多くおさめている。

教育時論 第 983-1141 号 (大正元—5 年) 復刻版

文部省における教育政策の立案過程を示す省内の動静、教育制度の実態、教育実践、教育思想に関する論考、教育団体の活動状況の報告などを中心的内容とする。

Political Affair. Vol. 45-53 (1966-1974)

(アメリカ共産党機関誌)

資本主義世界の心臓部であるアメリカ合衆国の内部にあって、マルクス・レーニン主義政党として活動してきたアメリカ合衆国共産党の理論的、実践的活動成果が収録されている。執筆者は、ガスホール、アブセカー、フォスター、ハイマンリュウアー、ヴィクターパーローなど同党の著名な理論家、指導者をはじめ西欧の理論家からなる。

教育公報～帝国教育会機関誌～ 第 183-319 号 (明治 29—40 年) 復刻版

教育制度・政策の解説、教育理論・教育思想の紹介、教育実践の報告、帝国教育会、府県教育会、各種教育団体の活動報告などを中心内容とする。

Beiträge zur Geschichte der Arbeiterbewegung. Jg. 1-16 (1959-1974)

(労働運動史寄稿)

ドイツ労働運動史, 国際労働運動史の専門紙。

◆ 電算化ニュース

第2回 図書業務電算化委員会

と き 昭和60年2月14日(木)>

と ころ 北海道大学附属図書館会議室>

「システム開発準備部会報告書」が同部会から上申され,作成に至る経過報告並びにその内容について説明が行われた。また,今後の進め方について,本報告書が「システム設計実施部会」に引き継がれ実施段階での基礎資料となるべきこと,および,稼動順位としては当初予定どおり,部局を含めた雑誌受付業務と本館,分館の閲覧業務からスタートすること等が確認された。

図書館業務用電子計算機機種選定委員会(第1回)

と き 昭和60年4月4日(木)>

と ころ 北海道大学附属図書館研修室>

機種選定のために事務局で用意した資料の内容について質疑応答,意見交換が行われた後,今後の進め方について,機種決定を6月末から7月上旬に設定し審議を進めること,次回はメーカーに対する提案作成要領を審議すること等が決められた。

図書館業務用電子計算機機種選定委員会(第2回)

と き 昭和60年4月30日(火)>

と ころ 北海道大学附属図書館研修室>

事務局で作成した「北海道大学附属図書館電算化システム提案依頼書(案)」に基づき審議し,一部字句の修正,追加等を行った上,本案を承認。メーカー9社に対し5月27日を期限として依頼書を発送することとなった。

電 算 化 準 備 記 録 (3)

昭和60年2月~60年4月

年 月 日	事 項	年 月 日	事 項
60.2. 8	閲覧用書誌データ作成打合せ(閲覧課)	60.3.19	第119回図書館委員会(電算機導入計画概要,機種選定委員会の発足)
60.2.14	第2回電算化委員会	〃	開発専門委員会(道地区)札幌地区打合せ会議
60.2.19	構内電話回線利用に伴う整備工事打合せ(設備課,企画課)	60.4. 4	図書館業務用電子計算機機種選定委員会第1回
60.3.13 ~26	閲覧用書誌データ校正作業(整理課,閲覧課)	60.4.30	〃 第2回

機種選定委員会並びにシステム設計実施部会の発足

昭和 60 年度予算で、かねて要求中の電算機導入のための経費が認められたことに伴い、学内の専門家による機種選定を行うべく下記のメンバーからなる委員会を 3 月 19 日発足させ、前記とおり 4 月に 2 回の会合を開き実質的審議に入った。また、これまでシステム開発準備部会でやってきた電算化の基本設計を実施に移行するための「システム設計実施部会」の下記メンバーも 5 月 1 日付けで委嘱、発足させ、具体的準備、設計作業に入ることとなった。なお、実務的な準備、設計作業は、△印の各班々長を除くメンバーにより行う予定である。

図書館業務用電子計算機機種選定委員会委員

附属図書館長	教 授	大野公男 (委員長)	経済学部経営学科	助教授	関口恭毅
大型計算機センター	助教授	林 恒俊	工学部情報工学専攻	教 授	宮本衛市
情報処理教育センター	助教授	長田博泰	工学部電子工学科	助教授	栃内香次

システム設計実施部会

◎附属図書館学術情報課長	山 田 常 雄	附属図書館学術情報掛	富 田 健 市
○ " " 図書館専門員	遼 昭 二	医学部図書整理掛	東 重 俊
△ " 会計掛長	河 野 宏 光	農学部図書掛	紙 屋 国 男
△ " 受入掛長	佐 藤 透	事務局 (担当掛) として	
△ " 閲覧掛長	宇 野 弘 純	附属図書館情報処理掛長	荒 木 修
△ " 学術情報掛長	高 砂 慶	" 情報処理掛	杉 田 福 夫
△工学部図書閲覧掛長	和 田 章 憲		
附属図書館受入掛	小笠原敏明		
" 目録掛	諏訪田義美		
" 閲覧掛	清 水 弘		
" 参考調査掛	小 西 和 信		

◎ 責任者 ○ 補佐役 △ 準備部会各班々長 (職種指定) および部局から

◆ 受 贈 図 書

本学教官著作物

[本 館]

○名 誉 教 授

矢田俊隆・田口 晃 (法学部)

オーストリア・スイス現代史 (世界現代史 25) 山川出版社 1984.

○文 学 部

岡田宏明・岡田淳子 (共著)

The Hot Spring Village site, 1-4. [1974-1984].

The Qaluyarmiut; an anthropological survey of the Southwestern Alaska Eskimos, 1-2. Dept. of Behavioral Science, Faculty of Letters, Hokkaido University, 1982-1984.

○水 産 学 部

座間宏一・高橋裕哉 秋サケの資源と利用 恒星社厚生閣 1985.

◇ 人事往来 ◇

○新館長

大野 公男 (理学部教授) 60. 4. 1

○前館長

東 晃 (工学部教授) 60. 3. 31 (停年)

○教養分館長

高田 誠二 (理学部教授) 60. 4. 1 (再任)

○図書館委員会委員

上田 一郎 (事務局 長) 60. 4. 1

菅野 富夫 (学 生 部 長) //

眞野 脩 (経 済 学 部 教 授) //

棚井 敏雅 (理 学 部 教 授) //

横沢 英良 (薬 学 部 助 教 授) //

黒柳 俊雄 (農 学 部 教 授) //

松井 愈 (教 養 部 教 授) //

吉崎 昌一 (教 養 部 助 教 授) //

中野 美代子 (言 語 文 化 部 教 授) //

黒田 登志雄 (低温科学研究所助教授) // (再任)

塩川 洋之 (免疫科学研究所教授) // (再任)

外川 継男 (スラブ研究センター教授) //

坂本 三哉 (医療技術短期大学部教授) //

○北海道大学学術情報システム準備検討委員会委員

新保 勝 (工学部教授) 60. 4. 1

○配置換・転任等

山田 常雄 学術情報課長 (兵庫教育大学教務部図書課図書館専門員) 60. 4. 1

若菜 利民 整理課課長補佐 (医学部附属病院総務課課長補佐) //

遠 昭二 学術情報課図書館専門員 (工学部総務課図書整理掛長) //

久原 秀志 整理課庶務掛長 (医学部人事掛長) //

河野 宏光 // 会計掛長 (// 経理掛長) //

田中 一郎 // 目録掛長 (文学部図書掛長) //

高砂 慶 学術情報課学術情報掛長 (閲覧課学術情報掛長) //

荒木 修 // 情報処理掛長 (水産学部図書掛長) //

輪木 安雄 閲覧課教養分館閲覧掛長 (経済学部 //) //

大垣 雅子 整理課目録掛 (整理課整理掛) //

桜 洋子 // (//) //

諏訪田 義美 // (閲覧課学術情報掛) //

砂田 和子 // (整理課教養分館整理掛) //

吉竹 忍 閲覧課閲覧掛 (北見工業大学附属図書館) //

富田 健市 学術情報課学術情報掛 (整理課雑誌掛) //

吉田 恭子 // (//) //

杉田 福夫 学術情報課情報処理掛 (閲覧課閲覧掛) //

杉尾 勝茂 弘前大学附属図書館閲覧課長 (閲覧課図書館専門員) //

遠藤 雄作 文学部事務長補佐 (整理課課長補佐) //

成田 稔 農学部庶務掛長 (整理課庶務掛長) //

嶋 崎 功	施設部企画課工事司計掛長(整理課会計掛長)	60.4.1
山 本 幾 夫	理学部図書掛長(整理課整理掛長)	"
黒 田 泰 行	経済学部図書掛長(整理課雑誌掛長)	"
星 賀 隆	文学部図書掛長(閲覧課教養分館閲覧掛長)	"
岩 本 攻	経済学部図書掛(整理課整理掛)	"
船 木 敏 美	工学部図書整理掛長(理学部図書掛長)	"
佐 藤 清 一	水産学部図書掛長(北見工業大学附属図書館運用係長)	"
大 家 克 巳	北見工業大学附属図書館運用係長(経済学部図書掛)	"
長谷川 弘 子	学術情報課学術情報掛(整理課雑誌掛)	"
土 田 京 子	整理課受入掛(教育学部図書掛)	60.5.1
松 野 と も 子	学術情報課学術情報掛(工学部総務課図書整理掛)	"
山 田 良 江	工学部総務課図書整理掛(整理課受入掛)	"
吉 田 恭 子	医療技術短期大学部学務掛図書室(学術情報課学術情報掛)	"
春 名 克 彦	工学部総務課図書整理掛(文学部図書掛)	"
栄 森 義 晴	理学部図書掛(工学部総務課図書整理掛)	"
大 垣 徇	工学部総務課図書閲覧掛(理学部図書掛)	"
横 山 彰 一	工学部経理課用度掛(工学部総務課図書閲覧掛)	"
星 野 祐 子	理学部地球物理学科(医療技術短期大学部学務掛図書室)	"
宮 本 慶 子	薬学部図書掛(薬学部会計掛)	"
伊 藤 美保子	文学部図書掛(薬学部図書掛)	"
吉 村 靖 恵	農学部図書掛(文学部図書掛)	"
午 来 信 子	教育学部図書掛(農学部図書掛)	"
平 松 麗 子	医学部図書閲覧掛(医学部図書整理掛)	"
富 本 寿 子	工学部総務課図書閲覧掛(工学部化学系学科図書室)	"
江 畠 千江子	工学部化学系学科図書室(工学部総務課図書閲覧掛)	"
○退 職		
柄 内 幸 子	整 理 課 整 理 掛	60.3.31
阿 部 貞 夫	整 理 課 会 計 掛	"
佐々木 キ ク	整 理 課 庶 務 掛	"
岡 田 知 子	閱 覧 課 閱 覧 掛	"
林 田 敏 江	閲覧課教養分館閲覧掛	"
山 下 博 子	"	"
○採 用		
大 道 環	閱 覧 課 閱 覧 掛	40.4.1
竹 内 由 子	整理課教養分館整理掛	"
西 山 理 英	閲覧課教養分館閲覧掛	"
古 沢 千 春	"	"

北海道大学附属図書館報 「櫛蔭」 (通巻65号)

1985年5月31日 発行 発行人 松 川 衛

編集委員 遠 昭二(長)・久原秀志(図)・山口國雄(図)・高砂 慶(図)・藤島 隆(医)・岡田 潔(経)
松野とも子(図)

発行所 北海道大学附属図書館 札幌市北区北8条西5丁目 電話代表 716-2111 (2967)

印刷所 文 栄 堂 印 刷 所 札幌市中央区北3条東7丁目 電話代表 231-5560・5561